

を行い、色調シミュレート画像として画像編集ソフト「adobe Photoshop®」の色調補正機能を用いて、歯冠色の彩度と明度を変化させた画像を2種類作成した。これを被験者と歯科衛生士に提示し似合い評価を行い、被験者による自己評価と歯科衛生士による客観的評価の結果を比較した。被験者の11のシェードはA1、A2と明度が高く、より白い歯へ憧れていることが伺える。また、色調シミュレート画像の似合い評価は、被験者による自己評価では、より白い歯の画像を、歯科衛生士による客観的評価では、やや白い歯の画像を選んだ頻度が多く有意差が認められた。歯の色の感じ方は、患者と歯科衛生士で違うこと、さらに肌の色や唇の色などに影響を受けることを考慮し、その上で、その人に合った歯の色を提案していく必要があることが示された。

摂食嚥下障害患者への取り組みについて ～現状報告と今後の課題～

宮 福子 (附属歯科診療所)

当診療所では摂食嚥下リハビリテーションのチームアプローチを、平成26年4月から行っている。今後も摂食嚥下障害の患者は増加することが予想されるため、担当患者の傾向を調べることで、今後の対応、対策について検討した。

担当患者は評価不能項目が多いような認知の問題がある方、かつ重度摂食嚥下障害の方が多く、そのため現在行っているのはほとんどの方が口腔ケア、アイスマッサージであり、積極的なリハビリテーションの介入は行えていないのが現状であった。誤嚥性肺炎予防が目的の方が多いため、再評価の実施が行われていない場合も多く認められた。

現在は介護施設からの紹介患者が多く、そのため高齢、重度の障害、認知機能の低下を認める患者が対象となっている。重度となつてからの回復は困難なため、障害が進む前段階での紹介となるような支援体制が必要だと考えられた。

第88回：2017年8月31日(木) 座長：渡邊美幸

歯科技工実習における拡大模型の活用 —ポンティックの基底面形態—

五十嵐雅子 (歯科技工士学科)

製作したポンティック基底面形態の拡大模型を歯科技工実習に活用し、歯科技工士学科2年生31人を対象に、1年次と2年次の各種ポンティック基底

面形態の理解度をアンケートと筆記試験で調査した。

アンケート結果では、1年次では「離底型」を除く「偏側型」「リッジラップ型」「船底型」「鞍状型」のポンティックを47～92%の学生が「イメージしにくい」と回答した。2年次になって、実習で拡大模型を活用し「偏側型」を除く4種のポンティックを用いたブリッジを製作した結果、84%以上の学生がイメージできるようになった。

2年次の試験結果では総平均が92点で、満点の学生が21人であった。学生がイメージできるようになった理由は、1位が「実習でブリッジを製作したから」2位が「拡大模型を観察したから」3位が「拡大模型を使って説明があったから」であった。以上のことから、実習に拡大模型を活用することは、学生の理解度向上に効果的であったと思われる。

要介護高齢者の摂食嚥下リハビリテーション ～介入から3年経過して～

江川広子 (歯科衛生士学科)

野村章子 (歯科技工士学科)

平成26年4月より本学附属歯科診療所では、摂食嚥下リハビリテーションを開始した。そこで、最初に介入した99歳の女性、「流涎とむせ」を訴えた患者に対し、3年経過したので報告する。

摂食嚥下リハビリテーションは、歯科衛生ケアプロセスの1)アセスメント、2)カンファレンス、3)計画立案、4)介入、5)再評価を一連の流れに沿って継続した。患者は月2回の歯科受診で義歯調整と歯周メインテナンスのリコール時に、リハビリテーションを繰り返した。

介入は姿勢・体位の確保、筋ストレッチ、呼吸訓練、口唇・頬・舌の訓練、唾液腺マッサージ、音節交互反復訓練、プッシング・プリング訓練をその日の体調に合わせて実施した。口唇訓練では訓練用ボタンを使用して測定した口唇閉鎖力は、初回は400g、現在では1859gに上昇した。患者に測定値を報告すると、上昇することに喜びを感じ自宅では「1本のゴボウ」を唇に加え、強い力で引っ張る訓練を実施していると、誇らしい表情で明るく話をする。患者は高齢にもかかわらず、リハビリテーションを受け入れる意欲が向上し、歯科診療所に来院するのが楽しみとなり、訓練の楽しみが表情を豊かにした。このことから、患者対応に十分配慮しながら、受容の精神で暖かく接することを心がけた。

患者にとってのリハビリテーション効果は、口腔

機能等が向上していくことの喜びと、受診のために外出する機会が増えて、高齢者の閉じこもり予防とQOLの向上へとつながったのではないかと考える。

第89回：2017年9月28日（木） 座長：山田隆文

第6回国際歯科技工学術大会 第39回日本歯科技工学術大会 ～学生テクニカルコンテスト～

高橋圭太（歯科技工士学科）

平成29年5月27,28日に台湾で開催された、第6回国際歯科技工学術大会及び第39回日本歯科技工学術大会に参加したので報告した。

今回、本学から歯科技工士学科2年生の竹内梨帆さんが学生テクニカルコンテストに参加し、本暮教授、飛田教授、高橋が同行した。日本、韓国、台湾から計100名が参加し、彫刻時間は1時間、彫刻部位は上顎左側中切歯、下顎左側第二大臼歯であった。

結果として、残念ながら入賞には至らなかった。練習量、技術、スピードにおいては問題なく十分な実力はあったが、主な原因として、彫刻部位に下顎左側第二大臼歯が選ばれたことがあげられた。評価基準は非公開であった。事前の情報収集も不十分であったことが反省点である。

今回の経験を経て、今後は彫刻の練習量ばかりを意識せず、練習内容の視野を広げた指導を行っていく。また、様々な彫刻部位にも学生が対応できるような指導を心がけ、今後の学生の技術、知識の向上に貢献したいと考えている。

地域で目指す食と栄養の支援 多職種への歯科訪問診療の紹介

小林 梢（附属歯科診療所）

牧野真理（附属歯科診療所）

地域包括ケアシステムに伴い、地域の病院が介護の現場を理解し、医科と歯科、および医療と介護が連携して高齢者や障害者の食と栄養を支援できる地域が一体となった体制づくりを目指し、にいがた西地区食と栄養サポートネット（INS ネット）を立ち上げた。運営検討メンバーは、新潟医療センターと明倫短期大学が主となり多職種で構成されている。

今回、私たちは第2回地域交流研修会を開催し、訪問歯科診療の内容と、口腔ケアの必要性和実践的な取り組みをテーマにした講習を行い、参加者から様々な意見をいただいた。歯科治療・訪問歯科診療

に対する疑問や、歯科技工士の職域に興味を持っていただいた事など、学内にその内容を報告した。

第90回：2017年10月26日（木） 座長：飛田 滋

歯科衛生士国家試験と入学時基礎学力調査 －3年制教育課程において－

平澤明美（歯科衛生士学科）

本学歯科衛生士学科では、学力や入学動機など多様な学生を受け入れざるを得ない状況の中、平成17年入学生以降、2年制から3年制教育課程で入学時基礎学力調査を実施してきた。3年制教育課程開始の平成21年3月までの歯科衛生士国家試験合格率と入学時基礎学力調査の得点には有意に相関があり、国家試験合格率の年次推移は大きな変化は表れていなかった。その後平成22年入学生の基礎学力調査の得点が過去最低点を示したが、平成27年入学生までは得点が上昇傾向に転じていた。しかし、本年入学生の基礎学力調査の得点は平成27年と比較して明らかに低くなっている。また3年制教育課程は数回の変更が実施され、そのたびに授業時間が減少し、本年入学生は3年制教育課程の中で最低の授業時間数ある。基礎学力調査から国家試験合格率向上のため、学習意欲の維持・学力向上のために多様な補習を実施してきたが、平成29年度生はより強固な対策の必要となる。

学会テーマに関するワークショップ

ファシリテーター：植木一範（明倫短期大学学会委員長）

第91回：2018年1月25日（木） 座長：飛田 滋

平成28年度教育活性化補助金申請報告会

植木一範（歯科技工士学科）

本暮ミカ（歯科衛生士学科）

渡邊美幸（歯科衛生士学科）

天池千嘉子（歯科衛生士学科）